

カモノハシ

たち愛らしく
え焦がれ30年
びたくちばし
の退化突き止め
びれた対面

長いくちばしを持った愛らしい姿と、哺乳類なのに卵を産むという珍しい生態のカモノハシ。その魅力に取りつかれた愛知学院大教養部の講師、浅原正和さん(三三)＝静岡県掛川市出身＝が十三日、日本で初めての専門書を刊行する。子どものころから約三十年に及ぶカモノハシへの愛を詰め込んだ一冊だ。

(菅原千晶)



浅原さんが2008年にシドニー水族館で撮影したカモノハシ

日本初の専門書 愛知学院大講師刊行へ

愛

浅原さんとカモノハシとの出会いは小学生の時。科学雑誌をめぐっていたら、平べったくて長いくちばし



日本初のカモノハシ専門書を執筆した愛知学院大講師の浅原正和さん＝愛知県日進市の同大で

に水かきを持ち、茶色の毛に覆われた動物の姿が目についた。飛び込んでみた。「変な特徴ばかりで衝撃を受けた」。以来、生態などを詳しく調べようとしたが、専門の本がないうえ、日本の動物園や水族館では飼育されておらず、カモノハシの絵を描きながら「会いたい」と憧れるようになった。

一度は地元の大学に入学したが、生物の研究者になりたいとの夢が再燃し、中退や浪人を経て二十歳で京都大農学部へ。学内の総合博物館にある哺乳類の研究室に出入りし、先輩に交ざって英語の論文を読んで、カモノハシの祖先の化石について学んだ。三年生の時に生息地のオーストラリアを訪れて本物と対面し、「ついに会えたね」と感激した。

大学院に進んでタヌキやクマなど哺乳類の食べ物と歯の形の関係を調べ、博士号を取るめどがついた二〇一三年春から専門的な研究を開始。今のカモノハシには歯がないが、一千万年前の化石にはある。その謎を解こうと、頭の骨格の標本や剥製などが充実している米国の博物館を訪問。くちばしでエサを探すため歯の下の神経が発達し、結果として歯が退化したことを突き止めて、米国の科学誌に発表した。

三重大の特任講師を経て愛知学院大に勤務し、カモノハシを通して生き物の進化や社会と科学との関わりについて教えている。子どものころに科学雑誌で見た「こんな生き物がいるのか」と驚かされたカモノハシ。あれから三十年たった今、「僕を研究の道に引っ張ってくれたカモノハシは、まさにアイドル。専門書だけでなく、今度は絵本も出したい」と語った。

十三日に刊行する「カモノハシの博物誌」(技術評論社)は税抜き二千二百八十円。一七九八年に英国人がオーストラリアの池で発見した経緯や卵を産むのに母乳で育てる生態、浅原さんの研究成果などで構成している。